

市長賞

わが道を生きると決めて立葵かたむくほどに今盛りなり

石野逸子

【評】 我が道を生きると決意した作者の心の中と、傾くほどに咲き盛っている立葵とが見事に合致した一首である。余命わずかな弟を思い、早い里帰りを嘆いた母を偲び、自身の退職の日を振り返る。そうしたさまざまな人生体験を乗り越えて、新たな人生に向かって意を決した作者の心意気が伝わってくる。その思いを代弁するかのように花をつけている立葵。静岡市の花でもある立葵を一首の中心に置いた構成もまた見事である。